

	月		火		水		木		金		
	AM	PM	AM	PM	AM	PM	AM	PM	AM	PM	
総合診療	2診		総合診療 廣西	糖尿外来 河井		総合診療 廣西		総合診療・センター長 (認知症センター) 廣西	総合診療(循環器) 羽野		
	3診	糖尿外来 河井		呼吸器 中西(正)	総合診療(循環器) 羽野	泌尿器外来 稲垣(武) (2・4週)	肝臓 佐藤				
	4診		皮膚科 (奇数週) 神人 (偶数週) 鎗山	脳神経内科 中西(-)		脳神経内科 中西(-)		リウマチ膠原病 応援医師 (第2週)		放射線科 中井	
	新患5診	堀		伊藤		応援医師		河井		堀	
	外科診							櫻井 【第3週を除く】			
脊椎ケアセンター	6診	大岩	認知症センター 大岩		上野 【第1週】	大岩	大岩			大岩	
	7診	整形外科 延與		整形外科 中川	足の専門外来 浅井(奇数週)	骨粗鬆症外来 寺口	整形外科 延與		整形外科 中川		
	8診	整形外科 米良(好)		整形外科 寺口		整形外科 北山	整形外科 米良(好)		整形外科 北山		
眼科	白井 (しらい)	佐々木 (奇数週)	白井 (偶数週)	高田	雑賀   岡田 (1回)   小門(奥門・家庭外来) (1回・2・4回)	佐々木	子ども外来 白井	白井 (しらい)	白井 (うすい)	佐々木	術前外来
	高田			黄斑外来 (白井うすい)	佐々木	白井 (うすい)					
小児科	青柳			樋口		米良(深)	青柳	青柳		米良(深)	青柳
リハビリテーション科	隅谷			隅谷		隅谷		隅谷		隅谷	
	坂田			坂田		坂田				坂田	
認知症疾患医療センター		大岩					廣西	廣西		中西(-)	
検査	内視鏡	伊藤	垣本 C F	白井		岡田 月1回 不定期			岡田 C F		
	エコー	応援医師 心エコー					羽野 心エコー				

診察受付/月曜～金曜:午前8時45分～11時30分 ※第1週の水曜日午後は、加藤医師が救急対応 令和3年1月1日現在



# あじさい



vol.35  
2021.冬号



## あけましておめでとうございます。

昨年ほまさに新型コロナ対応に明け暮れた年だったと思います。新型コロナの診療に関しては、伊都橋本地域の近隣病院と協力し、当院も職員一丸となって対応いたしました。一時、職員の感染が判明し、診療を停止するという事態となったことをお詫び申し上げるとともに、たくさんの方々から「頑張れよ」というあたたかいお声がけをいただき、力強く鼓舞していただいたことにも改めて感謝申し上げます。

本年は従来の病院機能を可能な限り回復し、伊都橋本地域のための医療という機能をいっそう充実させ、とくに高齢化の進む周辺地域のお役に立てるよう、新しい取り組みも展開していきたいと思っております。まだまだ新型コロナ感染症の先行きは不透明であり、ご迷惑をおかけすることもあるかもしれませんが、当院へのご支援ご鞭撻を宜しくお願い申し上げます。上記の写真は新型コロナ対応のため早朝に出勤した際、北西の空にかかっていた素晴らしい虹を、当院の駐車場から私が撮影したものです。

今年は安心して安定した未来に虹の橋がかかりますように。

紀北分院 分院長 廣西 昌也



## 「かるて師匠の健康高座」

分院長・内科教授 廣西昌也

紀子: 紫外線ってウイルスを殺したり、皮膚癌の原因になったりするって聞いてから怖くなっちゃって。美容のためにシミも怖い。あんまり外に出ない方がいいのかな。

可流亭: こんがらがってしまうかもしれないけど、紫外線を全く浴びないのもダメなんだよ。

紀子: ええ! そうなんですか。

可流亭: いまコロナのことであんまり出歩くなって言われているけど、家にもっていったことから、骨折してしまう人が多いって報告もあります。

紀子: どこを骨折するのですか?

可流亭: 多いといわれているのが疲労骨折といって、なかでも膝の下のあたり、MRIという機械で調べないとわからないようなタイプだね。特に若い人に多かったみたい。

紀子: どうしてそんなことになるんですか?

可流亭: たぶんコロナで外出を自粛しすぎて、太陽の光を浴びなかったものだから、骨が弱くなってしまったんでしょう。

紀子: えっ? 太陽の光を浴びないと骨が弱くなるんですか?

可流亭: 骨の健康にビタミンDが必要なのは知っているかな? ビタミンDはね、紫外線のおかげで活性型に変わって、骨を強くしてくれているんだ。

紀子: ビタミンDは食べ物には入っていないの?

可流亭: ビタミンDは魚やキノコに入っているんだけど、太陽の光に混じっている紫外線を浴びないと骨は強くないんだよ。

紀子: 私の弟は家でゲームばかりやっているんだけど、それもダメですね。

可流亭: 昔の子どもはいつも外で遊んでいたから良かったんだけど、室内でばかり過ごしていると、いわゆる「もやしっ子」になってしまって、実際に子どもの骨折も増えているそうだよ。

紀子: 紫外線を浴びるにしても浴びないにしても、「過ぎたるは及ばざるが如し」ですね。

可流亭: 女性はシミも気になると思うけど、特に冬は少しくらいは太陽の光を浴びた方がいいよね。夏も日陰でいいから、少しは外に出てほしいと思います。骨の弱りが気になる人は、病院で骨の検査をしてもらうと、参考になると思います。



### 【お知らせ】

・ 次回の紀北分院通信「あじさい」春号は4月発行です。

### 和歌山県立医科大学附属病院紀北分院 分院長 廣西昌也

〒649-7113 和歌山県伊都郡かつらぎ町妙寺219 TEL0736-22-0066(代) FAX0736-22-2579  
ホームページアドレス <http://www.wakayama-med.ac.jp/med/bun-in/index.html>  
2021年1月発行



### 【掲載内容】

- ・ 令和3年 新年の御挨拶
- ・ 子どもの目の病気
- ・ 外来診療医担当表
- ・ 着任の御挨拶
- ・ かぜと抗菌薬
- ・ かるて師匠の健康高座



## ■ 着任の御挨拶



放射線科 准教授  
中井 資貴

このたび、2020年10月より和歌山県立医科大学附属病院紀北分院に着任いたしました放射線科医の中井資貴(なかいもとぎ)と申します。専門は、画像診断とIVR治療(画像下治療)です。

今から100年余り前、ドイツのレントゲン博士がX線と呼ばれる目に見えない光を使って骨などを映し出せることを発見しました。今では、このX線を利用したCTもしくは磁気を用いたMRIで、人体内部を非侵襲的に詳細に描出できるようになっています。しかも造影剤を投与することにより、さらに内臓や血管、腫瘍などを正確に観察することができます。我々放射線科医は、直接患者様と接する機会は少ないですが、主治医の依頼にもとづき、最適な撮像法を用いてCTやMRIの画像診断を行い、その結果を読影レポートとして主治医あるいは紹介医に報告いたします。

また、血管撮影装置やCTなどの画像診断装置を利用したインターベンショナル・ラジオロジー(IVR)治療(画像下治療)も行っています。血管内に挿入したカテーテルから、腫瘍に直接薬剤を注入したり、閉塞した血管を風船のついたカテーテルで開通させたりする治療がIVR治療の代表例です。メスなどで体を切ることなく、体に優しく負担の少ない治療を提供いたします。

今後は、画像診断とIVR治療の2本柱で、和歌山県紀北地域の医療のさらなる向上を目指して、安全で質の高い医療を提供すべく努力してまいりたいと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。

## ■ 子どもの目の病気



眼科 准教授  
白井 久美

### <子どもの視力の発達>

生まれたばかりの新生児の視力は0.01くらいしか見えていません。ものを見ることによりゆっくり視力が発達して、3歳で0.6、就学時までに1.0まで発達します。視力の発達が悪いものを弱視といいます。原因は遠視・近視・乱視や斜視(目の位置のズレ)などが多く、眼鏡や訓練、時には斜視手術で治療します。視力の発達は8歳頃までが重要で治療が遅くなると弱視が治らないこともあります。そのため3歳半検診、就学時検診での視力検査は重要で、異常があれば眼科受診が必要です。

### <子どもに多い目の病気>

子どもは目の調子が悪くても自分からそれを言うことは少なく、家族や幼稚園の先生が気付くことが多いです。まぶたが赤くはれている、目が赤い、目ヤニがでる、痒がる、よく目をこする、まぶしがる、まつげが黒目にあたっている、などです。よく見られる目の病気の例をあげます。

1) まぶたにできる麦粒腫(めばちこ)や結膜炎(白目が赤くなりヤニが出る)の多くは細菌の感染が原因ですので、抗菌薬の目薬や飲み薬で治ります。結膜炎の中にはウイルス性の流行性角結膜炎(はやり目)のこともあり、これは家族や友達にうつりやすいので幼稚園や学校を休まないといけません。

2) アレルギーが原因で結膜炎が起こることもあります(アレルギー性結膜炎)。目が痒い、よくこする、目が赤いといった症状です。かゆみを我慢できずにかきこすって、結膜(白目)がふくれることもあり、驚いて眼科に来られますがすぐにひきますので、これはあまり心配いりません。アレルギーを抑える目薬や炎症を抑えるステロイドの目薬で治療します。アトピー性皮膚炎では目のアレルギーが重症化しやすく、中には角膜(黒目)に白い濁りができて視力が下がることもありますので、ひどくなる前に治療することが大事です。

3) まつ毛が目目の表面に当たる睫毛内反症(さかまつげ)では、よく目をこすったり、まぶしがったりすることが多いです。成長とともに良くなることもありますので、小さい年齢では経過をみますが、大きくなってもしよければ手術をします。

### <ご家族の方に気をつけて頂きたいこと>

子どもは眼帯をすると視力が下がることがありますので、まぶたや目の表面が気になっても家庭で眼帯はしないでください。眼帯が必要かどうかは眼科の診察で決めます。また目の状態が気になる時、写真をとっていただければ、眼科での診察の時に参考になることもあります。目の病気で視力が悪くなって、斜視や眼振(目の小刻みな揺れ)がおこることもあります。つまり斜視や眼振の検査で目の病気がみつかることもあります。何か気になることがあれば早めに眼科を受診して下さい。

## ■ 着任の御挨拶



リハビリテーション科  
学内助教  
坂田 ゆき

2020年10月から紀北分院リハビリテーション科に着任しました、坂田ゆきと申します。縁あって和歌山県立医科大学附属病院リハビリテーション科に入局、大学勤務を経て今回紀北分院に赴任することになりました。

リハビリテーションは活動を育む上で超高齢社会では必要不可欠となっています。紀北分院周辺、かつらぎ町での高齢化率は36.8%と全国平均を上回り、そのリハビリテーションを行う必要性は明らかです。リハビリテーションは疾病や外傷で低下した身体的・精神的機能を回復させ、障害を克服するだけでなく、活動を育むという要素が加わっています。日常での活動は、起き上がる、座る、立つ、歩く、手を使う、見る、聞く、話す、考える、衣服を着る、食事をする、排泄する、寝るなどがあります。これらの活動を組み合わせて、掃除、洗濯、料理、買い物などの家庭での活動につながります。さらにそれを発展させ学校生活、就業、地域行事、スポーツなどの社会での活動となります。これらの活動を行うことで個人としての役割を実感できるとして、リハビリテーションは「活動」まで求められる境地が変わってきました。

様々な疾患・障害・病態に対して、それぞれに適したリハビリテーションを行います、その根底には活動を育むという目的があります。

当院では外来リハビリテーションや短期間の入院強化リハビリテーションなどを行っております。リハビリテーション治療を通して、紀北地域の方々の活動を育むことができるよう貢献していきたいと考えております。

## ■ かぜと抗菌薬



小児科 講師  
青柳 憲幸

子どもさんがかぜひき(気道感染)で受診した際に(下痢でも同様の話がありますが今回はかぜについて)、「抗菌薬/抗生物質は出しませんよ。」という説明を受けることがあることと思います。耐性菌の問題が大きくなってきて、抗菌薬適正使用という方針が出ています。今後次々と新しい抗菌薬が出てくる可能性は少なく、今あるものを必要に応じて大切に使用しなければなりません。

かぜのほとんどはウイルスで起こります。普通の経過は、まず微熱やだるさ、咽頭痛などがでて、続いて鼻汁や鼻づまり、その後に咳や痰が出てくるようになり、発症から3日目前後を症状のピークとして、およそ1週間で良くなっていきます。「かぜ3日」という言葉がありますが、4日をすぎたでだんだん悪くなっていくときは普通の経過ではないので、合併症や二次的な細菌感染の合併を考慮して精査が必要で、抗菌薬の必要性を考慮します。また、家族の方がみて、「いつもと違う、何か変。」というときも進行の早い怖い病気のことがあり注意します。他にも、新型コロナが疑われれば検査が必要です。

具体的に抗菌薬が必要となる「かぜ」としては(抗菌薬が効くということでウイルスが原因ではないわけです)、溶連菌性の咽頭炎・百日咳・マイコプラズマ感染症などが挙げられます。

まれな例で、飲み込みが悪くよだれが出るほどの喉の痛みがあるときや、首が痛くて頭が傾いていたり首が動かさせないときは、もっと怖い病気の場合もあり注意が必要です。また熱の出始めにかぜと思われていても、熱が続き、眼が赤くなったり発疹が出てきたりしたときは「川崎病」で入院して治療が必要、ということもあります。

ここでは昨秋から一部のこども園で患者さんが出ている溶連菌性咽頭炎について説明します。通常、のどの痛みを伴う熱で受診されます。周りの流行状況も参考にしますが、次のような症状が複数みられる場合に可能性が高いとされます。すなわち、38℃以上の発熱・咳がない・圧痛を伴うリンパ節のはれ・膿のついた扁桃炎の4項目です。実際には、口蓋垂(いわゆるのどちんこ)を綿棒でこすり、インフルエンザの時のような抗原検査で確認することも多いです。あとで急性腎炎のような合併症を起こすことがあるので、きっちりと抗菌薬治療をしなければなりません。アモキシシリンというペニシリン系の抗菌薬の10日間治療が標準です。熱が下がっても、抗菌薬をすぐやめてはならず、きっちり飲みきることが必要です。

ついでに、アメリカの有名な医学雑誌に、乳幼児に対する抗菌薬処方と肥満の間に有意な相関があることが報告されています。抗菌薬を使用すると、腸内細菌の多様性や組成に変化が生じるようです。もっと身近な例では、抗菌薬で下痢することがありますよね。やはり必要な場合に限るということでしょうか。

「熱があるから抗菌薬」、「念のために抗菌薬」という考えは改める時期になってきているというお話でした。